

桑野 祐一郎

キリバ・ジャパン株式会社
セールス・ディレクター

ソ リ ュ ー シ ョ ン



クラウドの是非

先二回に渡り、グローバル資金管理の要諦およびマルチバンク対応に関してのポイントを述べてきた。本稿では、企業のグローバル資金管理をマルチバンクで対応するための仕組みとして、クラウドコンピューティング(以下、クラウド)の是非を述べていきたい。

クラウドの普及

数年前と比較して、新聞やTVでクラウドという言葉を目にしない日はないほど、日本ではこの言葉が定着してきた感がある。

従来、企業向けアプリケーションの利用には、企業がハードウェア、ソフトウェア、ストレージ、ネットワークといったIT資源を自前で保有、管理する必要があった。クラウドでは、最低限のPC、ブラウザ、インターネットに接続できる環境を用意するだけでいい。企業はネットワーク(インターネット)を介してアプリケーションを利用し、そのサービス利用料を提供企業(以下、ベンダー)に払う形になる。システムを所有するリスクを排除し、構築に際して企業側の負荷を抑え、短期間かつ低コストで利用を開始できることに利点がある。

トレジャリーシステムの現在

多くの日本企業のグローバル資金管理の実情はどうか。会計系の巨額なシステム投資と比較し、財務系のシステム投資は、欧米と比較してまだまだ手つかずといった感が否めない。

財務部門は、表計算のスプレッドシート(以下、シート)で職人張りの切り貼り作業を駆使し、財務業務を行っている。このシートは、複雑すぎて特定の個人

でなければ管理できないという声も珍しくない。また、非効率で間違いも多く、作成や集計に時間がかかる。月に一回、子会社から本社に資金ポジションがシートで送付され、本社の集計に二週間かかるという話もざらである。これでは何の手も打てない上、企業の意思決定は二週間前の古い情報がベースになっており、欧米のそれと比較すると空恐ろしい。

なぜ、多くの日本企業で財務業務はシートのままなのか。実態としては、シートを利用するか、従来型の重厚長大なシステム構築の二つしか選択肢がなかったため、多くの企業が高コストの従来型システムを嫌い、シートを使わざるを得なかったとの声を耳にする。事実、多くのCFOからは、「三〜五年先まで原始的なシートの仕組みを放置していくつもりはないが、現実的な選択肢が今までなかった」との声を聞く。

トレジャリーシステムクラウド利用の利点

グローバルで資金管理を実現していく場合、地理的に極めて広範囲をカバーしなければならない。従来型の企業が保有・管理する仕組みが不向きなのは明らかである。今後、日本企業の海外におけるM&Aが増えた際、従来型システムの展開はリスクや制約が多い。場合によっては、各国で弾力的に発動される多様な特殊な規制への対応が、時間的制約のある中で求められるかもしれない。クラウドの場合、拠点ごとに対応する業務を選別し、導入できるため利用開始までの期間が短い。具体的には、グローバル全体ではなく、一カ国からでもスタートでき、必要性に応じたシステム利用を自由かつ大胆に行えるのが特長となる。小さく始めて、効果を確認してから拡げていく、多

段階的なアプローチが選択できるのも、企業のクラウド導入の追い風となっている。従来型システムは、グローバル全体の将来像に対して投資対効果を明確にしながらマネジメントの承認を得る。コストも膨大となり、結果、承認が得られず何も進まないというケースも多かった。クラウドの場合、最悪、導入後に効果を得られなければサービスの利用を中止すればいい。従来型のそれと比較し、サービスを長期的に利用してもらいたいベンダーと企業を目指すベクトルが極めて近似なところも利点である。

クラウド選定に際しての留意点

システム(サービス)を選定していくに当たりいくつかの選定のポイントを紹介していく。

①実績

システム導入実績に加え、SWIFTネットワークでの銀行接続実績が豊富かどうか。

②システムの適用範囲

資金・流動性、財務取引、為替管理、支払管理、サプライチェーンファイナンスと企業の状況、課題に応じて段階的導入アプローチが可能かどうか。包括的に財務業務全般をカバーしているサービスは少ない。

③カスタマーサポート

カスタマーサポートがグローバル規模で企業の課題や問題を解決できるかどうか。

④信頼性とシステム性能

SLA(サービスレベル)に関する合意にて稼働率に対する保証があるかどうか。クラウド環境が複数拠点で冗長化、バックアップされているかどうか。稼働率を契約上保証しないサービスも多い。

⑤サービスレベル

障害回復の指標として、RTO(目標復旧時間)、RPO(目標復旧時点)が高いレベルで設定されているかどうか。RTO、RPOが設定されていないにもかかわらずクラウドを名乗るサービスも多い。

⑥セキュリティ

企業の重要な財務データを預かる以上、堅牢なセキュリティレベルが維持されているかどうか。十分なセキュリティ対策、システム監査を受けているかどうか。ISAE3402やSSAE16(前SAS70)に準拠しているかどうか。

⑦使いやすさ

地域、拠点ごとの複雑な業務にカスタマイズ(追加開発)なしに、設定変更で対応できるか。日本語、英語以外の言語に対応しているかどうか。必要なデータを自由に抽出できるかどうか。レポート機能の追加に別途費用がかかるというものも多い。

⑧他システムとのインテグレーション

会計システム(ERP)と柔軟な連携が取れるかどうか。連携に制約があるものも多い。以上のような点を選定の基準とすれば失敗を避けられるであろう。

また、二〇〇%クラウド(ビュアクラウド)かどうか。シングルプラットフォームかどうかもベンダーの営業に確認することをお勧めする。システムアーキテクチャーとしては、ASPであったとしてもクラウドと表すベンダーは意外に多い。利用する側からすると違いはわからないが、これには利用者に関わる重大な落とし穴が潜んでいる。

ASPの場合、利用個社ごとの環境を用意し、ネット

ワークを介してサービスを提供するため、ユーザは一見するとクラウドとの違いがわからない。

二〇〇%クラウドの場合、ユーザ企業複数がアプリケーションやデータベースを共有するため、ベンダーの管理運用効率がよく、システム投資を集中できるため、システムパフォーマンスやセキュリティが常に高いレベルで維持できる。個社ごとの環境を要すASPはベンダー側の管理運用効率が悪く、システム投資が分散されるため、ユーザ側にそのつけが跳ね返ってくる。

シングルプラットフォームかどうかというのもなく議論されないポイントであるが、資金管理ソリューションの中には、複数のベンダー製品を買収により一つのサービスとして提供しているものがある。その場合、対象業務が拡大した場合、マスターデータが共有されておらず、二重入力やデータ連携のコストが別途かかるサービスもある。

クラウドの場合、サービスを継続する限り最新の機能を費用内で利用できることが利点である。アップグレードを年間何回実施しているかどうかを確認することも重要である。年に一回程度しかバージョンアップをしないクラウドは、大抵システムアーキテクチャーが従来型のもので無理やりクラウド風に変えているもの(ASP)か、複数のプラットフォームで一つのサービスと擬しているものどちらかである。

最後に

グローバル資金管理を実現していく上で、仕組みやシステムの構築に過剰なコストと時間をかけることを避け、スピーディに戦略的な意思決定を行っていくために何を選ぶべきか明らかである。